

書 評：佐藤洋一郎・1999・DNA 考古学・201 pp・東洋書店・ISBN 4-88595-266-2・1600 円+消費税。

イネの系統を追い続けている著者の近刊である。「イネの起源に迫る」、「縄文農耕とDNA」、「DNA 分析のこれから」の3章と佐原真氏との対談「DNA と考古学」からなるコンパクトな一般向けの面白い本である。『稲の来た道』（裳華房）、『DNA が語る稲作文明 起源と展開』（NHKブックス）について出版されたもので、内容的には大筋においては同じだが、出版の度に最新の情報を取り入れ、また前著の時には不明確だったことについて新たな結果に基づき修正、加筆がなされていて著者の真摯な態度が伺える。

第1章「イネの起源に迫る」こそまさに著者の一番の専門のところ、彼の研究の成り立ちからDNAそのものの説明、そして遺体からのDNA抽出の苦労話、等々、やさしく、面白く書かれている。我々がしばしば混同している稲のジャポニカとインディカ、ジャポニカの中の熱帯ジャポニカと温帯ジャポニカについてわかりやすく整理していて、日本の稲には熱帯ジャポニカと温帯ジャポニカの両方の系統が存在してきたことを理解させてくれている。第2章「縄文農耕とDNA」は稲で培った技術を用いて、縄文時代の様々な植物のDNA分析により、栽培、文明にまで話を広げたものである。いわば「DNA 考古学」はここまで出来るのだという実例として、クリの実、スギ材、うるしを取り上げている。第3章「DNA 分析のこれから」ではDNA そのものの詳しい説明を改めて与えるとともに、分析方法、そしてこの方法によってどのようなことが可能になるかなど、将来の可能性に夢をのせて展開している。最後の佐原氏との対談は、お二人とも好き放題を言まくる御仁であるから読んでいて面白い。これを聞いていた人たちはもっと面白かったことと思う。佐原氏のつつこみが結構厳しく、それにちゃんといつも答えられる佐藤氏も大したものである。しかしまあ、DNAで何でも出来ちゃう話になってしまうのは実のところ困ったものである。

一般向けに限られたボリュームの本だからと著者も承知で説明を簡略化したことは、こちらも重々承知で、それでもあえて言わせて貰いたいことがいくつかある。

炭化米、炭化種子という言葉が使われる。DNAがとれるのは「炭化していない炭化米」だという。「炭化していない」の炭化という言葉は、植物質が無酸素状態で熱を受けてセルロースやリグニンなどの物質が炭素の単体となることである。「炭化米、炭化種子」とはそのようになったことにより元の形態を保持したものであるので、「炭化していない炭化米」というものはあり得ない。しかし遺跡の現場では黒くなって出土したものを「炭化米、炭化種子」

と呼んでいて、混乱を起こしているのは事実で、著者はそれを受けて本書でもそのように書いているのだろうが、この本にそのように書かれたことがさらに一般の人にも混乱を起こさせるきっかけになりはしないかと危惧している。

ジャポニカとインディカがDNAの欠失で区別できるという話でどうにも分からないことがある。話題のDNAの領域が欠失しているのがジャポニカでは3例、インディカで37例、欠失していないのがジャポニカで44例、インディカで6例とのことである。塩基配列の欠失は1回の突然変異で起きたと考えるのが常識で、ジャポニカとインディカの品種が分化する過程でこの欠失が起こったと考えると、3例、6例という例外があることはとてもおかしい。インディカと分かれた後、ジャポニカの中でふたたび同じところで欠失を起こして3例が生まれたということはあるにしても、一度インディカに起きた欠失がインディカの中で再び全く同じ場所に同じ配列の塩基が加わって6例の例外が出来たということは考えられない。もとの文献を見ればきちんと書いてあるのかも知れないが、稲の門外漢の私には本書に書かれている範囲の内容では納得がいかない。そして、結果としてその欠失があるかないかがジャポニカとインディカの判定に使われると言うのはもっと納得がいかない。「インディカか、あるいは欠失のあるジャポニカ」とかの結論にどうしてならないのだろうか？

日本では一般向けの本でごく普通に行われていることだが、文献リストがない。確かに一般向けではあるが、本書は考古学と遺伝学の境界領域、あるいは複合領域を扱ったものである。考古学の人に限らず、評者もこの著者の専門領域にとっては「門外漢」であり、「一般」の一人である。ただ違うところは、容易にはかなえられないかもしれないが、このような平易な解説書をもとに、もっと踏み込んだものを勉強したいという希望を持っている点である。植生史研究の7巻1号に能城修一氏が“The Green Archipelago”の書評の中で、その翻訳書が原著にある文献を一切捨て去ってしまったことを怒りと悲しみをもって批判しているが、我が国の「一般書」の慣習で、大変残念なことである。一般書がたくさんの人に興味を持ってもらい、その中からさらに勉強し、そして研究の道に入る人も生み出すきっかけとなることを願って書かれるのなら、充実した文献リストを載のせるのは必須のことだろう。精力的に研究をどんどん進めて日々新しい成果を上げている著者なので、次著を執筆される機会が非常に近い将来にもまたあるのだろう。是非とも次著での引用文献、参考文献の掲載をお願いしたいものだ。（鈴木三男）